

令和 6 年度(前期日程)

入学者選抜小論文試験問題

小 論 文

試 験 時 間 90 分

文 学 部

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. この冊子の問題は、2 ページからなっています。試験開始後、この冊子又は解答紙に落丁・乱丁及び印刷の不鮮明な箇所など
があれば、手を挙げて監督者に知らせなさい。
3. 下書き用紙 1 枚、解答紙 1 枚があります。**解答紙には受験番号を必ず記入しなさい。**
なお、解答紙には、氏名や題名などは記入してはいけません。
4. **解答は、必ず解答紙の指定された場所に記入しなさい。**
5. この冊子の白紙と余白部分は、適宜下書きに使用してもかまいません。
6. 試験終了後、解答紙は持ち帰ってはいけません。
7. 試験終了後、この冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

※この冊子の中に解答紙及び下書き用紙が挟み込んであります。

次の課題文を読んで設問に答えなさい。

主要な帰属はたったひとつしかない、と考える人々がいつの時代にもいました。それはどんな状況にあっても他の帰属に優越しているの、「アイデンティティ」と呼んでよいのはその帰属だけだということです。ある者たちにとっては、それは民族であり、他の者たちにとっては宗教や階級であったりするわけです。しかし世界中で生じているさまざまな紛争に目を向ければ、絶対的に他に優越する帰属などないことがわかるはずです。自分の信仰がおびやかされていると感じるとき、人はアイデンティティとは宗教的な帰属にほかならないと考えがちです。しかし自分の母語やエスニック集団がおびやかされれば、宗教を同じくする者たちとでも激しく争うのです。トルコ人とクルド人は言語はちがうとはいえ、ともにイスラム教徒であることに変わりありません。だからといって両者の衝突は血塗られたものにならなかったのでしょうか？ フツ族はツチ族と同じカトリック教徒で同じ言語を話しますが、だからといって両者の殺し合いが回避できたのでしょうか？ チェコ人とスロヴァキア人はともにカトリック教徒ですが、だからといって両者の共存はうまくいったのでしょうか？

これらの例からはっきりわかると思いますが、各人のアイデンティティを構成する諸要素のあいだにはつねにある種の上下関係が存在します。しかしそれは不変ではなく、時とともに変化し、人のふるまいを根底から変えるのです。

しかも私たち一人ひとりの生活において重要な帰属は必ずしもつねに、主要なものとはされる帰属、つまり言語、肌色、国籍、階級、宗教といった帰属ではありません。ファシズム時代のイタリア人の同性愛者の例を考えてみましょう。この人にとって、彼という人格のこの部分が重要な意味を持っていたのはたしかですが、それは職業や政治的選択や宗教的信仰以上に重要だったわけではไม่ใช่。ところが突然、彼は国家的な弾圧の対象となり、いまや侮辱や強制移送や死の危険に曝されるのです——そういう話を本で読んだか映画で観たことがあります。したがって数年前までは愛国者であり、おそらくナショナリストであったこの男性は、いまでは目の前をイタリア軍が行進していくのを目にしても喜びを感じることはできない。それどころか、その敗北を望むようにさえなっているかもしれない。迫害を受けたことで、性的指向がほかの何の帰属にもまして大切に思えるようになり、当時最高潮に達していた国家への帰属意識さえかすんでしまうのです。戦争が終わってようやく、より寛容になったイタリアで、この人は心から自分がイタリア人だと感じられるようになるでしょう。

人が主張するアイデンティティは往々にして、敵のアイデンティティを——ネガとして——写し取ったものです。カトリックのアイランド人男性は、まずイギリス人との宗教的なちがいを強調します。しかし君主制支持者に対しては、自分は共和制支持者だと言うのです。そしてゲール語を十分に知らない場合でも、少なくともゲール語っぽく英語を喋るわけです。カトリックの指導者がオックスフォード訛りで喋ろうものなら背教者扱いされかねません。

アイデンティティのメカニズムの——ときに微笑ましく、ときに悲劇的な——複雑さを物語る

例はまだいくらでもあります。

（アミン・マアルーフ（小野正嗣訳）『アイデンティティが人を殺す』による。

原文を改めた箇所がある。）

設問

傍線部の筆者の見解は、紛争や迫害の恐怖を例に述べられています。喜び、楽しみを生むこともある日常生活でのアイデンティティ形成、変容のメカニズムについてのあなたの考えを一〇〇〇字以内で述べなさい。